

第4回 武蔵野市文化振興基本方針策定委員会 議事要録

○日時	平成29年10月27日（金）午後7時～9時
○場所	武蔵野公会堂第1・2合同会議室
○出席委員	◎小林真理、若林朋子、宮崎倉太郎、木本幸恵、○酒井陽子、花柳美輝風、青木稔、富島佐紀、花田吉隆（◎委員長、○副委員長）
○傍聴者	2名
○事務局	市民部市民活動担当部長、市民部市民活動推進課長 教育部生涯学習スポーツ課長、（公財）文化事業団常務理事、吉祥寺美術館館長 他

1 議事

（1）これまでの意見を踏まえた方針の骨子案について

事務局より資料2「方針に盛り込みたい内容（これまでの委員会の主な意見）」により、方針の骨子につながるこれまでの意見について説明を行った。

各委員及び事務局より、6つの意見群を踏まえ、方針の骨子として示すべき内容をポストイットに書きながら提案した。その内容、および関連する発言は以下のとおり。

骨子案1

【示すべき内容】

- 子どもから大人まであらゆる人が身近な文化を享受
- 新たなターゲットと文化を身近に感じてもらうための施策
- 文化を必要としている人たちに必要な文化が届く施策
- 人々の文化交流や文化体験が自然に生み出される文化的なまち
- 新たな市民と創る文化
- これまでの文化と新しい文化
- 誰もが等しく文化を享受できる町という視点に基づきソフト・ハードの両面から見直します
- 必要とする人がすぐ情報を見つけられる、場所を知ることができることを目指す
- 市民一人ひとりが文化的に輝いてこそ、市も輝く
- あらゆる市民が自分にとっての芸術文化を等しく触れられる機会と環境を整えていく
- あらゆる市民が文化芸術に等しく触れられる機会と環境を整えていく

【委員】 今回の議論は、1～6まで抽象論を挙げていくことが目的だが、それらを包含するよう大きな目的も必要になるように思う。

【委員】 「新たなターゲットに文化を身近に感じてもらうための施策」、「文化を

必要としている人たちに必要とされる文化が届くための施策」が考えられるとよいと思った。

【委員】 骨子案1～6が同じようになった。全体のコンセプトを思いついたからだが、そのヒントになったのが武蔵野プレイスの考え方だ。領域横断的で壁がなく、回遊性に富むこと、「アクションの連鎖」が起こり得る「機会」と「場」を提供し支援するというのが参考になると感じた。

【副委員長】 これまで武蔵野市のまちづくりに取り組み、生活基盤をつくってきた人たちの文化はこれからも大切にしていけるが、それとともに新しい文化を受け入れようという意識もしてもらおう方向性で「これからの文化と新しい文化」と提案したい。

【委員】 やや長くなるが、ここは「誰もが等しく文化を享受できる町という視点に基づきソフト・ハードの両面から見直します」と提案する。

【委員】 あらゆる市民に届けることは難しい。鑑賞や体験に興味を持って、どこでできるのかが分からないという話を聞く。必要としている人たちが簡単に鑑賞・体験できる仕組みが大事だと思う。

【委員】 まちづくりにおける文化というものを考えたとき、文化は、特定の芸術家だけのものではないはずだ。行政による文化振興は、すべての市民の参加を前提に考えられるべきだ。市民一人ひとりが文化的に輝くということが重要であり、市民一人ひとりが輝いてこそ、まちが輝くということが究極の目標だと思う。個性ある武蔵野市をつくっていこうとするならば、市民一人ひとりが輝いているということが大事だ。

【委員】 「あらゆる市民が自分にとっての芸術文化を等しく触れられる機会と環境を整えていく」と提案したが、人それぞれに文化は異なるだろう。自分にとっての文化を享受できるとよい。

【事務局】 「あらゆる市民が自分にとっての文化を享受できる」ことが大切と考えている。触れられる機会と環境の整備として示した。

骨子案2

【示すべき内容】

- 誰もが享受できることへの入り口のひとつとしての体験
- 生活に溶け込む文化の提案
- 継続意欲を掻き立てるような高いクオリティのワークショップの提案から、その後のフォローの必要性
- 鑑賞体験ではなく、自由な創造や自らが活動できる場の提供
- 市民の主体的な文化的体験・創造の提案ができる環境や仕組みを整備する
- 文化の体験をあらゆる世代に提供すること

- いつでも、どこでも、だれでも常に文化に触れられる環境
- 鑑賞・体験・参画とバランスのよい文化振興を努めます
- 鑑賞→クオリティの高い体験→発表できる場所という流れをつくる
- 参加型をもっと増やしていく
- 市民が文化活動を企画提案することを考える
- ワークショップのレベルは様々に設定する
- 団体に属さなければ参加できないのではなく、個々人で参加できる場をつくる
- （地域の）（個性ある）質の高い体験と自発的に“創造”できる場／仕組みづくり
- 創造性を育み、発揮できる機会を充実していく

【委員】 「誰もが享受できることへの入り口のひとつとしての体験」と提案したい。文化への入口は色々あると思うが、体験がキーワードになると思っている。

【委員】 3つのことを提案したい。「生活に溶け込む文化の提案」、「継続意欲を掻き立てるような高いクオリティのワークショップの提案から、その後のフォローの必要性」、「鑑賞体験ではなく、自由な創造や自らが活動できる場の提供」だ。

【委員】 環境や仕組みを整備することこそ大事だと考え、「市民の主体的な文化的体験・創造の提案ができる環境や仕組みを整備する」と提案したい。

【副委員長】 いまの意見に賛同する。ウィーンならいつもどこでも音楽が楽しめる。文化のシャワーが自由に享受できるというイメージがある。自分は「文化の体験をあらゆる世代に提供すること」とポストイットに書いたが、少し違うのかもしれない。

【委員】 「鑑賞・体験・参画とバランスのよい文化振興に努めます」と提案したい。

【委員】 ワークショップをやってきた立場からすると、クオリティは大事だと思う。参加する人が素人だからこそ重視すべきだ。さらに成果を発表できる場所があると充実するだろう。そのようなシステムをつくれたらよいと思う。

【委員】 4点ある。「参加型をもっと増やしていく」、「市民が文化活動を企画提案することを考える」、「市民が文化活動を企画提案することを考える」、「ワークショップのレベルは様々に設定する」ということだ。ワークショップの質について意見が交わされているが、参加者も様々なニーズがあるので、質の高いものもあれば、そうでないものもあってよいのではないか。

【委員長】 それは入門的な内容のワークショップがあってもよいという意見か。

- 【委員】 質の高いワークショップは予算もかかるだろう。無理のない範囲でできるとよいと思っている。
- 【委員】 「質の高い体験と自発的に“創造”できる場／仕組みづくり」と提案したい。
- 【事務局】 事務局としては「創造性を育み、発揮できる機会を充実していく」と考えている。

骨子案3

【示すべき内容】

- 身近で自由に集い創造できる場
- 文化に触れたい市民 子ども、若手アーティストの居場所となるような施設の充実と充実した運営
- （行政の部門的縦割りをなくし）まち全体で新たな創造体験の機会や文化的価値に出会える、日本で一番文化的回遊性に富んだまちを目指す
- 文化の成熟に必要な環境を整備する（ハード、システム、ソフト）
- 文化の「種」を植え、「陽」を照らし、水をまき、時間はかかっても、じっくりと文化を育てていきます
- そこに行けば必ず体験できる場所を知ることができる場所がある
- 「場の設置」その場に人が集まり、人の輪ができ、交流が生まれ、文化が生まれていく
- 文化が生まれるコミュニティづくり
- 文化芸術を介して人々が出会い、集う場を増やしていく

【委員】 「身近で自由に集い創造できる場」と提案したが、コミュニティセンターのことではないかとも思った。武蔵野芸能劇場や吉祥寺シアターがそのような場になればよいと思う。

【委員】 「文化に触れたい市民 子ども、若手アーティストの居場所となるような施設の充実と充実した運営」と考えた。

【委員】 武蔵野市の文化は何かと考えるとき、図書館が話題に上がらない。行政のセクションが違うからだろう。しかし、市民にはセクションは関係なく、文化振興は行政の部門的縦割りを通貫して取り組まなければならない。ホール等の文化施設に限らず、市民が文化的だと思うところを回遊できるまちを目指す。何を文化と考えるか、市民一人一人にも委ねる。そうすれば、「あらゆる市民が・・・」という大枠すぎる表現の課題にも対応できるのではないか。

【副委員長】 3つ目はシステムの話だろう。ハードをうまく使うためのシステムだ。

武蔵野プレイスも理念とハードが先行して、ソフトが十分でなかった時期があると聞く。いまは一体的にシステムづくりをするときだろう。それが武蔵野らしさになると思う。

【委員長】 芸術創造活動の中核になる施設を建設し、それをハブとして広がっていくようなイメージなのだろう。

【委員】 文化は環境整備なのだと思うが、時間がかかるということを前提にしないといけない。成果をすぐに問えるものではないという認識が必要だ。そこで、「文化の「種」を植え、「陽」を照らし、水をまき、時間はかかっても、じっくりと文化を育てていきます」と提案したい。じっくりやっていけば、まちに集まった人たちが刺激し合って次第にかたちづくられていくものが文化だと思うので、そこは大切にしてほしい。

【委員】 身近にあることはすごく大切だ。何かに興味を持ったときにすぐに行けて、いつどこで体験できるのかが分かるような場所があるとよい。そこで体験までできると、さらによいと思う。

【委員】 文化について行政がやるべきことは場をつくることだ。行政はそれ以上のことはするべきではないと思う。市民の主体的な参加に任せるべきだ。文化はコミュニティのなかで時間をかけて文化が熟成されていくものだと思う。

【委員】 「文化が生まれるコミュニティづくり」という言葉を考えた。

【事務局】 ここは場のことだと考え、民間も含めて「文化芸術を介して人々が出会い、集う場を増やしていく」というように考えている。

骨子案4

【盛り込みたい内容】

- 行政ができることは機会づくりと支援
- 市は、地域や団体、民間、学校、アーティスト、そして個人との文化での連携を持ち、意欲ある人たちへの応援を宣言
- 広く文化にかかわる人材、担い手を中長期的視野で育成する
- アートプロジェクトを実施できる団体の育成
- あらゆる人や団体がコラボし、活気ある文化創造となることを目指します
- 担い手をどんどんピックアップする
- 自発的活動が始まるような環境整備
- 行政、民間、市民、様々な文化の担い手の相互連携
- 多様な主体との連携を推進していく

【委員】 自主性を育むと考えたが、行政の役割は場を設えることと捉えて「行政

ができることは機会づくりと支援」という前回の意見を取り上げた。

【委員】 骨子案5にも関わる内容だが、「市は、地域や団体、民間、学校、アーティスト、そして個人との文化での連携を持ち、意欲ある人たちへの応援を宣言」と考えた。また、選挙もあり、市役所には職員の異動もある。行政だけでは継続的に取り組むことが難しく、運営に限界があるのではないか。

【委員】 ここは人材がテーマになってくるのだろう。そこで、「広く文化にかかわる人材、担い手を中長期的視野で育成する」と考えた。

【副委員長】 「アートプロジェクトを実施できる団体の育成」を提案したい。

【委員】 行政には文化の担い手と積極的につながってほしい。武蔵野市には人材はたくさんいると思うが、自分はあまり知らない。お互い知り合っていないと思うので、行政を介して紹介してもらえると、自分たちで活動をはじめられると思う。その導入をサポートしてもらいたい。

【委員】 武蔵野プレイスは、NPOがそのような機会を得る場所になっている。文化活動における武蔵野プレイスのようなものがあつた方がよい。

【委員長】 行政がやることを前提にしなくてもよいと思っている。この次の議題として文化振興の役割について話すことになっているが、そこで行政の役割を考えたい。

【委員】 「行政、民間、市民、様々な文化の担い手の相互連携」と考えた。

【事務局】 確かに骨子案4と5の内容は相互に関わる面が多いと感じた。事務局としては、連携と捉え「多様な主体との連携を推進していく」と考えている。

骨子案5

【示すべき内容】

- 市は、地域や団体、民間、学校、アーティスト、そして個人との文化での連携を持ち、意欲ある人たちへの応援を宣言【再掲】
- 文化人に市内で活動するメリットを感じてもらうために必要なプロジェクト発動
- 文化にかかわる人材・市民が集える「文化的ハブ」を可視化する
- ハブとなる市民活動をつくる
- 文化を創造し、発展させるのは人です。人を育てていきます。
- 行政がすべきことは「土壌づくり」「活動の支援」
- マネジメントができる人材の育成
- 行政は支援に徹底する
- 文化芸術を支える人材を発掘し、育成していく

- 【委員】 骨子案4と5は同じもののように感じてしまい、考えがまとまらなかった。
- 【委員】 先ほどの「市は、地域や団体、民間、学校、アーティスト、そして個人との文化での連携を持ち、意欲ある人たちへの応援を宣言」は骨子案5にも適用できると考えている。そのほか、「文化人に市内で活動するメリットを感じてもらうために必要なプロジェクト発動」も提案したい。
- 【委員】 骨子案4は人材育成、骨子案5では育成のために必要なことと考え、「文化にかかわる人材・市民が集える「文化的ハブ」を可視化する」と提案したい。文化の担い手となる人たちがどこに集えばよいのか、相談できるのか、情報があるのかが分からない。武蔵野市におけるその中心が見えないので可視化する必要がある。
- 【副委員長】 骨子案4と5は似ていると思う。自分のアールブリュット展での経験からすると、やはりハブになる市民団体が必要なのだと思ったので、そのことを提案したい。
- 【委員】 難しかったところだが、ここは人材だと思う。そこで、「文化を創造し、発展させるのは人です。人を育てていきます。」と考えた。
- 【委員】 行政ができることは土壌づくりであり、活動の支援だと思う。そのためにはマネジメントができる人材の育成を行っていかなければならない。
- 【委員】 行政の役割に関わってくると思うので、「行政は支援に徹する」ということを示してはどうか。
- 【委員長】 行政は、自らの限界を自覚する必要もあるかもしれない。
- 【事務局】 事務局としては、骨子案4では連携を取り上げたので、こちらでは人材と捉え「文化芸術を支える人材を発掘し、育成していく」と考えた。

骨子案6

【盛り込みたい内容】

- 「らしさ」をここで新たに定義する（つくる）。文化の大都会東京の背後にある立ち位置（都会の周縁地）。
- 市民発信による「武蔵野市文化」の機会づくりと支援
- 文化的多様性を重視するまちであり続け、市民が文化にかかわる機会づくり、支援、土壌づくりをする
- 生きていく原動力となる文化になる
- 武蔵野らしさを大切に、新しい武蔵野の魅力を創っていきます
- 武蔵野市らしさの創造、しかし創造ではなく発見
- 創るべきは町の雰囲気
- 武蔵野らしさの追求

○武蔵野市のアイデンティティを大切に、これからの地域の文化を育てていく

【委員】 「武蔵野らしさ」という発言もあったので、「らしさ」をここで新たに定義する」と考えた。動詞を「定義する」とするのか「つくる」を採用するのは考えたい。また、強いて言えば「武蔵野らしさ」は、東京の背後にあるという立ち位置だろう。そういう環境ということも示してよいのではないか。

【委員】 ここでは「市民発信による「武蔵野市文化」の機会づくりと支援」と考えた。自分としては、武蔵野文化ではなく、「武蔵野市文化」を考えたい。

【委員】 ここでは基本的な姿勢を示すとよいと思い、文化的多様性というキーワードが浮かんだ。そこで「文化的多様性を重視するまちであり続け、市民が文化にかかわる機会づくり、支援、土壌づくりをする」と提案したい。人それぞれに価値観や考え方は異なる。それをカバーできる言葉は、陳腐かもしれないが多様性だ。市として文化的な多様性も重視していることを打ち出し、どのような環境でも市民が安心して文化に関わってもらえることを示せるとよい。その上で機会を提供し続けることが重要だ。

【副委員長】 個人的なことだが、苦しい時期に、あえて文化に触れる時間をつくることで乗り越えられたことがある。その経験を踏まえると、「生きていく原動力となる文化になる」と提案したい。

【委員】 「武蔵野らしさをつくる」ということは大事だと思う。そこで「武蔵野らしさを大切に、新しい武蔵野の魅力を創っていきます」と考えた。ただ、武蔵野市のよさやアイデンティティは、元々あるものではなく、それに関わるなかで実感するものなのだと思う。そのような機会を組み込んでいけるとよいと思う。

【委員】 吉祥寺には井の頭公園のように歴史のあるものもあるが、時代とともに昔からあったものがなくなっている。悲しいことだと思う。過去の文化を残しながら、同時に時代に合わせて未来に向けた文化もつくっていくことが大事だと思う。それが武蔵野市らしさというのではないか。昔を知っておくことは大事なことだ。

【委員】 武蔵野市らしさをつくることは大切なことだ。前回の委員会で、まちが文化的な雰囲気になれば文化が生まれるという意見があったが、それにならうと、つくるべきはまちの雰囲気なのかもしれない。

【委員】 「武蔵野らしさの追求」という言葉を考えた。

【事務局】 すでにアイデンティティという言葉を使っているが、「武蔵野市のアイデンティティを大切に、これからの地域の文化を育てていく」というように考えている。

【委員長】 今回いただいた意見を踏まえて、事務局でまとめて次回に骨子案として示してほしい。

(2) 各主体の役割について

【委員長】 これまでに様々な取組が提案されているが、どのように実現するのが問題になる。そこには、行政だけでなく様々な人たちが関わることになるが、まずは行政の役割については考えたい。

【委員】 行政が文化振興として行ってきたのは施設整備だ。武蔵野市は周辺自治体に比べても恵まれている環境にあると言える。一方、施設での事業への行政の関与について言うと、自治体として何らかの方向性を示してきたわけではない。もちろん文化事業団や芸術文化協会の支援は行ってきたが、支援の結果を十分に評価できていない。

【委員長】 できれば、文化事業団を運営する立場としての意見を聞きたい。指定管理者なので、行政とは立場が異なるはずだ。

【委員】 指定管理者の立場から行政の役割を考えると、採算性の兼ね合いから自主事業をたくさん実施しているが、施設を活用して市民の発表の場や交流する場をつくることを促してもらってもよいのではないかと思う。設置主体として、既存施設がハブのような役割を担うような方針を示してもよいはずだ。

【委員】 行政にとってアーティストやプロデューサーの育成は難しいと思う。ライブハウスを経営する立場で参加しているが、音楽に関する発言をしてこなかったのは、行政には難しいと思っていたからだと思う。アーティストや作家と直接関わるよりも、活動や交流ができる場所をつくることを期待したい。コミュニティセンターの役割や使い方を見直すという考え方をとってほしいと思う。身近にある施設ではあるので、行政として考えてもらいたい。

【委員】 文化振興において行政が大いに力を発揮するのは広報だ。行政区域全域に情報を行き渡らせることができるのは行政だけだ。また、助成制度などの制度設計にも長けている。市民をいかにサポートできるかを念頭に制度設計をしてもらえれば強力な支援になるだろう。

今後期待することは、「土壌づくり」である。職員の定期的な異動は、文化振興の考え方を役所内に伝搬するメリットがある。一方、事業を停滞させがちだ。その解決方法としては、行政の外部に知恵袋を置くことだろう。行政の外側と継続的に連携する体制をつくることが重要だと思う。

【副委員長】 今回、文化振興にまちづくりの観点が持ち込まれたことで、文化振興方

針を考えることになったと理解している。まちづくりをキーワードにするなら、縦割り行政を変えていかないといけない。文化振興には環境を整えることで市民をエンパワメントすることが有効なのだと思うが、そのためには行政が縦割りで事業をやっているはいけないと思う。

一方、行政にばかり頼るのではなく、市民が自らネットワークをつくり、自分たちのやりたいことを実現していく努力も必要だと思う。ハブとなる施設という意見もあったが、人が動き、つながっていくことも大事だ。

【委員】 市役所で文化振興を担当する職員は、文化が生まれる現場をじっくり見ていく必要があるだろう。そこで得たことを事業に反映できるはずだ。それとは別に、文化の必要性について考え、議論する必要があるという指摘があったが、未来を担う若者たちが場を持ってよいのかもしれない。そこに大人も混ざって、議論することが大事だと思う。

【委員】 大学で授業をしている立場で言うと、行政には学校教育において日本文化を教えることに取り組んでもらいたい。いまの子どもたちは自国の文化を知らない。知っておくべきことは学校で触れられるとよいと思うし、協力してくれるアーティストは少なくないと思う。

【委員】 文化事業団は自ら事業を行い、市民の生活に文化的な潤いを提供している。それは大切な行政役割だが、一方で、場をつくるという役割もあるはずだ。前回の委員会で取り上げた小樽市のピアノの例のように、市民が交流し、文化的な潤いを生み出していくために場をつくることを考えたい。

【委員】 あらゆる主体をマネジメントすることができるのが行政なのではないか。ただ、マネジメントをするためには、文化の担い手に関する情報やノウハウの蓄積を持っていた方がよいと思う。

【委員長】 様々な意見をいただいたところで、いくつかの事例を紹介させてもらいたい。文化振興は行政の職員だけ取り組むことが難しい領域なので、文化に関する専門職員を雇用する例や市民主導で行っている例がある。さらに、第三極の立場の組織として、専門的な人材で構成される組織をつくり、そこで取組を実施する例もある。それがアーツカウンシルだ。芸術文化振興に関する助成、事業、評価をすべて専門性を有する外部の組織に委ねるという仕組みだ。

(以下、他自治体事例等の概要について説明)

行政の外側に組織を設けると、その組織が直接予算をとれるわけではなく、市長や議員と話す機会も少なくなる。ただ、場づくりや人のネットワークは、外部組織の方がやりやすいだろう。行政にすべてを求める時代ではない。行政の役割を検討する際には、アーツカウンシルとい

う組織のあり方もあることを参考にしてもらいたい。

【委員】 行政の得意なことは、委員会のような場をつくることだ。人を集めて、場を設える。一方、公平性が求められるばかり、広く市民を巻き込めなところがある。そこが苦手なところだ。その隘路をつく方法が、いま紹介いただいた半公的な組織なのだと理解した。文化事業団は、その役割に近いとは思っている。

【委員】 方針が策定された後、どのように実行されるのか疑問に思っていた。小金井市では、条例後の計画策定のため、実行を担う組織が立ち上がったと紹介されたが、武蔵野市では、どのように方針を実行しようとするかで、今後の議論のレベルも変わってくるのではないかと。

【委員長】 小金井市の場合は、計画策定途中で実行委員会が組織された経緯があった。その前提だったので具体的に話すことができた。

【委員】 小金井市が組織をつくったときには予算がついていたのか。

【委員長】 それほど潤沢に予算があったわけではないと聞く。

【委員】 継続的に文化振興に取り組む組織を立ち上げようとする予算が必要になる。武蔵野市がそれを負担し続けられるのではあれば、新しい組織づくりもよいだろう。一方で、武蔵野市にかぎらずだが、これまで文化振興を担ってきた公益財団に力を発揮してほしいとも思う。アーツカウンシルについては、行政から完全に独立していないことが運用を難しくしている部分もある。海外ではアーティストがギルド（組合）をつくって活動する例があるが、自発的に集まってくる人はいるはずだ。武蔵野市にとってのアーツカウンシルは何かということ、色々な人たちが集まって考えるところから始めて、人の輪を広げていくと、まちに必要とされる組織ができるのではないかと。そのなかで、様々な分野の人が集まり、スキルを発揮し合うギルドのような組織ができるとよいと思う。

【副委員長】 協働ではなく、主導というところが大変だと思う。市民が主導ですべてのことができるわけではない。行政であれば、このような方針をつくり、それに沿って様々なプレゼンテーションを行い、予算を取り付け、市民の納得を得ながら、事業を進めていく。それをすべて市民が担うことはできないと思うので、市民が行う範囲を明確に示し、行政が協力する部分を提案するなど、役割分担を考えた方がよいだろう。

【委員】 行政に限界があることはよく分かるが、武蔵野プレイスのような施設がつくれるということは、武蔵野市はすごい力があるのだと思う。あのような思い切ったことを行政には期待したい。

【委員】 アーツカウンシルについては、様々な実状を聞いており、課題もあると思う。何かをつくる時、年月が経つなかで最初のコンセプトがしがら

みのなかで変化して、形骸化していくことがある。組織が、よい方向に変わっていく仕組みができるとよい。

【委員】 方針を実行するために行政とは別の組織をつくることはおもしろい。ただ、やはり人材と予算の確保が大変になるだろう。土台の部分を詰めておかないといけないと思う。

【委員】 どのように実行するか考えないといけないと、あらためて気づいた。現状分析をおこなっているだけになってはいけない。

【委員長】 方針ができればすぐに外部に組織をつくろうという話ではなく、長い目でみた方がよい。ただ、着手は早い方がよい。実行に移すためには必要な検討だと思っている。

【委員】 方針を策定した後に、その後の進捗を評価することは考えないのか。

【委員長】 評価の考え方についても盛り込んでいくべきだと思っている。計画ではないので、どのように評価するか、考えないといけない。そのためには、方針において示される内容の具体性が決まらないといけない。その点は事務局で検討いただきたい。

2 事務連絡

(次回日程について)

第5回 12月15日(金) 18時～ @武蔵野芸能劇場小ホール

3 閉会